

# ポルトガル語における直説法過去未来・過去未来完了と 直説法半過去・過去完了のモダリティ的用法について

Sobre usos modais dos Futuros Simples e Composto do Pretérito  
e dos Pretéritos Imperfeito e Mais-que-Perfeito do Indicativo do Português

牧野真也

MAKINO, Shin'ya

## 1. はじめに

現代のヨーロッパ標準ポルトガル語（以下、略して PE と呼ぶ）においては、<sup>2</sup> 直説法過去未来と直説法過去未来完了は、往々にして大意の違いなく直説法半過去（直説法不完全過去）と直説法過去完了によって置き換え可能である（以下、直説法は省略）。特に日常の話し言葉では、(1)(2)(3)(4)(5)のような場合は半過去と過去完了でシステムティックに置き換えられ（cf. TEYSSIER 1984, pp.206-207; MATEUS et al. 2003, pp.156-157, pp.165-166, pp.256-257）、これが PE 口語の特徴となっている。

(1) Se eu tivesse dinheiro, iria / ia ao Brasil.<sup>3</sup>

「お金があったらブラジルに行くだろうに / 行くのに。」[非現実的な条件文の帰結節]

(2) Se eu tivesse (tido) dinheiro, teria ido / tinha ido ao Brasil.

「お金があったらブラジルに行っただろうに / 行ったのに。」[非現実的な条件文の帰結節]

(3) Gostaria / Gostava de falar consigo.

「あなたとお話しできたらよいのでしょうか / よいのですが。」[話し手の願望の婉曲的表現]

(4) Ele disse que voltaria / voltava no dia seguinte.

「彼は翌日に戻ろう / 戻ると言った。」[間接話法における過去未来]

(5) Ele disse que teria voltado / tinha voltado no dia seguinte.

「彼は翌日には戻っているだろう / 戻っていると言った。」[間接話法における過去未来完了]

他方、(6)(7)のように「と []」内の意味では半過去と過去完了による置き換えが不可能な場合もある。

(6) Teria-me [Ter-me-ia enganado] / <sup>x</sup>Tinha-me enganado na hora?! (左肩の <sup>x</sup> は置き換え不能の意)

「私が時間を間違えただって?! (そんなことはない)」[憤慨や驚愕を伴う反語的な疑問文]<sup>4</sup>

(7) A Maria teria / <sup>x</sup>tinha 20 anos quando a encontrei.

「私が Maria と会ったとき彼女は 20 歳だったであろう。」[過去時を視座とする推定]

以下では、置き換え可能な(1)(2)(3)(4)(5)と置き換え不可能な(6)(7)の差異を、問題の4時制が有する「基本的な文法素性」とそこから「比喻によって派生する拡張的な素性」の観点から分析し、現代PEの話し言葉において、どのような条件の下でこの置き換えが生じているかを明確にしたい。

## 2. 半過去・過去完了と過去未来・過去未来完了の基本的な文法素性

PEの話し言葉において上記の4時制が(1)(2)(3)(6)のように非現実性や婉曲性を表示するには、特徴的な文脈や状況が必要であることを踏まえ((1)(2)は条件節や条件的語句などの文脈, (3)は述語動詞が意志・願望・必要性などを指示する文脈, (6)は聞き手などが話し手にとって受け入れ難い事態に言及するような状況・文脈をそれぞれ必要とする), ここでは(4)(5)(7)を無標の用法と考えてその素性分析を行った。次の図はその結果をまとめたものであり(例は動詞 *estar* の3人称単数形), [過去視座] と [終結] と [推定] は1で設定した主題に関わる素性である。[0] は基本的な値は未指定であるが、特別な文脈・状況がなければデフォルト値として [-] が与えられることを示す。以下では、これらの素性について説明を行う。

	過去視座	終結	推定
半過去 <i>estava</i>	+	-	0
過去完了 <i>tinha estado</i>	+	+	0
過去未来 <i>estaria</i>	+	-	+
過去未来完了 <i>teria estado</i>	+	+	+

### 2-1. [+過去視座]

[+過去視座] は [+過去に置かれた視座] の略であり、これは事態の記述にあたって話し手が身を置く時間軸上の基準時(以下、視座という)が、過去の時区間、すなわち発話時を含まずにそこから後方に延びる時区間に置かれることを表示する。問題の4時制はすべて [+過去視座] であり、(8)のように、その視座を明示する文脈(ex. *quando cheguei*)を必要とする(cf. MATEUS et al. 2003, pp.139-140)。

(8) Ele *estava* / *estaria* / *tinha estado* / *teria estado* doente quando cheguei.

「私が着いたとき彼は病気だった / 病気だっただろう / 病後だった / 病後だっただろう。」

他方、これら4時制のそれぞれと [終結] および [推定] において同一の値を有する直説法現在・直説法未来・直説法単純過去(直説法完全過去)・直説法未来完了は原義的に [0過去視座] であるが、視座のデフォルト値として発話時が与えられるので、(9)のように、それを明示する文脈は不要である。

(9) Ele está / estará / esteve / terá estado doente.

「彼は（発話時から見て）病気だ / 病気だろう / 病気だった / 病気だっただろう。」

## 2-2. [終結]

この素性はある時間的視座から捉えられた事態の終結を表示する。ある事態の終結点か、何らかの時点や時区間の前に位置する場合を [+終結] とし、そうではない場合（時点や時区間の終点と同期したり、時点や時区間の後に位置する場合）を [-終結] とする。次の例文(11)の過去完了と過去未来完了は [+過去視座] と [+終結] の組み合わせによって“過去のある時点（この場合は *quando cheguei* で指示されている）から見える事態の終結”を表示し、(10)の半過去と過去未来は [+過去視座] と [-終結] の組み合わせによって“過去のある時点から見える事態の未終結”を表示する。

(10) Ele estava / estaria doente quando cheguei. 「私が着いたとき彼は病気だった / だっただろう。」

(11) Ele tinha estado / teria estado doente quando cheguei. 「私が着いたとき彼は病後だった / だっただろう。」

## 2-3. [推定]

本論での“推定”とは、ある命題が事実と一致する可能性について話し手がどのように判断しているかを述べる命題モダリティ *modalidade proposicional* の 1 つである。命題モダリティには他に法動詞 *poder* が表示する“憶測”や *dever* が表示する“推断”などがあるが、推定はこれらとは異なっている。<sup>5</sup>

(12) Ele agora estará em Lisboa. 「彼は今リスボンにいるだろう。」

(13) Ele agora pode estar em Lisboa. 「彼はいまリスボンにいるかもしれない。」

(14) Ele agora deve estar em Lisboa. 「彼はいまリスボンにいるにちがいない。」

(13)は *ou pode não estar em Lisboa* を加えて *Ele agora pode estar em Lisboa ou pode não estar em Lisboa*. 「彼はリスボンにいるかもしれないし、あるいはリスボンにいないかもしれない。」としても意味的に適格であるから、話し手は(13)において、命題 *ele agora estar em Lisboa* が事実と一致する可能性とその否定命題である *ele agora não estar em Lisboa* が事実と一致する可能性を等価と判断していることになる。これに対して、(12)に *ou não estará em Lisboa* を加えて *\*Ele agora estará em Lisboa ou não estará em Lisboa*. 「\*彼はいまリスボンにいるだろうし、あるいはリスボンにいないだろう。」とすることは意味的に不適格なので、(12)では、命題 *ele agora estar em Lisboa* が事実と一致している可能性のほうが、その否定命題である *ele agora não estar em Lisboa* が事実と一致している可能性よりも高いとの判断が示されていることになる。残る(14)は *Ele agora não pode não estar em Lisboa*. 「彼がリスボンにいないことは有り

得ない。」と論理的に等価であり、これは命題 *ele agora não estar em Lisboa* が事実と一致する可能性の否定を意味している。したがって、(14)において話し手は命題 *ele agora estar em Lisboa* が事実と一致する可能性のみを唯一の可能性と見做し、その否定命題である *ele não estar em Lisboa* が事実と一致する可能性を否定していることになる。現代 PE では、文が指示する事態の未来時への位置付けは“直説法現在+時間的語句”や“動詞 *ir* の直説法現在+不定詞”によって行われるのが一般的であり、未来諸時制は、推定などのモダリティの表示に用いられることが多い (cf. TEYSSIER 1985, pp.204-205; OLIVEIRA 1990, pp.356-363; CARREIRA 2003, pp.138-139; SANTOS 2003 “Futuro do indicativo e futuro perfeito”; MATEUS et al. 2003, pp.154-155, p.158)。

### 3. 基本的素性からの比喩的な意味拡張

1 の例文(1)~(8)では、2 で基本的素性として措定した [+過去視座] と [+推定] がそのまま用いられている場合もあれば、メタファーやシネクドキー、メトニミーといった比喩によって意味が拡張されていると考えられる場合もある。以下では、基本的素性からの意味拡張のプロセスを検討する。

#### 3-1. [+過去視座] → [+非現実視座] / [+別世界視座]

1 の(1) *Se eu tivesse dinheiro, iria / ia ao Brasil.* (非現実的な条件文の帰結節), (2) *Se eu tivesse (tido) dinheiro, teria ido / tinha ido ao Brasil.* (非現実的な条件文の帰結節), (3) *Gostaria / Gostava de falar consigo.* (発話時における話し手の願望の婉曲的表現) で見たように、現代 PE においては、非現実的な条件文の帰結節(1)(2)や発話時における話し手の願望を婉曲的に述べる表現(3)では、過去未来・過去未来完了と並んで半過去・過去完了の使用も可能で、話し言葉ではむしろ後者が一般的である。これら4時制のすべてに共通しているのは、直説法であることを除くと [+過去視座] だけなので、この素性が命題の“非現実性”や願望の“婉曲性”に関与していると予想される。実際、半過去や過去完了と同じく伝統的に過去時制として扱われてきたものの、文法素性の観点からは [0 過去視座] かつ [+終結] であって [+過去視座] ではない単純過去 (完全過去) は、次の(15)(16)から明らかのように、それ自体は非現実性や婉曲性を表示するモダリティ機能を持たない。

(15) \**Se eu tivesse (tido) dinheiro, fui ao Brasil.* [tivesse の非現実性と fui の現実性が矛盾する非文]

(16) *Gostei de falar consigo.* 「あなたと話せてよかった。」 [終結した事実]

したがって、命題の非現実性や願望の婉曲性に関わりを持つのは、単に事態を過去に位置付けることではなく、[+過去視座] すなわち“視座そのものを過去に置くこと”であると考えられる (単純過去は [0 過去視座] と [+終結] の組み合わせによって結果として事態を過去に位置付けているに過ぎ

ない。発話時から見て終結している事態は必然的に過去に位置するからである)。

では、なぜ [+過去視座] を有する形式が命題の非現実性や願望の婉曲性をも表示し得るのであるのか。話し手にとっては、“過去の世界”も“非現実の世界”も、自己や聞き手が属する“非過去の世界”や“現実の世界”に対立する“もう1つの世界”である。非過去・現実の世界を“現世界 *este mundo*”もしくは“直接的な生(生)の世界”とすれば、過去・非現実の世界は記憶・想起・想像などを介して到達するしかない“別世界 *outro mundo*”もしくは“間接的な世界”である(大略、前者は ALARCOS LLORACH, Emilio (1980) pp.137-141 の *actual(idad)*に相当し、後者は *inactual(idad)*に相当する)。この別世界性を共有する過去と非現実が、集合してより上位の意味的カテゴリーである謂わば“別世界”を形成し、[+過去視座] を共有する半過去・過去完了・過去未来・過去未来完了によってそれが表示されると考えられる。換言すると、[+過去視座] が [過去] と [非現実] に共通の本質である [別世界] を介して [非現実世界に置かれた視座] (略して [+非現実視座]) へとメタファー的に意味拡張し、<sup>6</sup> その非現実世界に置かれた話し手の視座から非現実世界の事態をも描写することが可能となるのである。

他方、半過去や過去未来によって表示される願望の婉曲性であるが、そうした願望自体は過去の事柄でもなければ非現実の事柄でもないの、[+過去視座] や [+非現実視座] から描写された事態とは言い難い。むしろこの場合は、種としての [+過去視座] がより一般的な類としての [+別世界に置かれた視座] (略して [+別世界視座]) へとシネクドキー的に意味拡張していると考えられる。<sup>7</sup> そして、この視座から願望を描写することによってそれを現世界から離れた別世界に — 言い換えれば、聞き手から離れた遠くに — 置き、その距離性によって願望から直接性を奪って強さを緩和するのではないかと考えられる。

### 3-2. [+推定] → [+条件に対する帰結の非必然性]

1 の(1) *Se eu tivesse dinheiro, iria ao Brasil.*「お金があったらブラジルに行くだろうに。」と(2) *Se eu tivesse (tido) dinheiro, teria ido ao Brasil.*「お金があったらブラジルに行っただろうに。」で見たように、過去未来と過去未来完了は反実仮想的な条件文の帰結節に用いられ得る。「もし A なら B だろう」とは「A が成立したら、非 B よりも B が成立する可能性のほうが高い」の意である。これは「非 B の可能性も残る」ことも含意するので、「条件/前件 A に対して帰結/後件 B が必然的であるとは言えない」と同義である。過去未来と過去未来完了が有する [+推定] は、厳密な意味では“命題と事実の一致可能性”についての話し手の判断であるが (cf. 2-3), (1)(2)の反実仮想文は事実が問題とはなっていないので、このように“条件に対する帰結の必然性”に関する話し手の判断へと変質していると考えられる。この意味拡張のプロセスであるが、命題と事実の関係についての判断である [+推定] が、“2つの事柄の間に成立する関係についての判断”という共通点を介し、条件と帰結の関係についての判断である [+条件に対する帰結の非必然性] (以下、略して [+非必然性]) へとメタファー的に拡張し

ていると考えられるであろう。

### 3-3. [+推定] → [+事実性緩和]

1の(3) Gostaria / Gostava de falar consigo. 「あなたとお話しできればよいのですが / よいでしょうが。」で見たように、過去未来は半過去と共に願望の婉曲的な表現に用いられ得る。このような用法では、母語話者にとって過去未来は半過去に較べてさらに丁寧な形式として感じられる(脚註3のインフォーマント全員の感想および CARREIRA 2003, p.67 の記述)。過去未来と半過去は基本的に [+推定] と [0推定] で対立するので (cf. 2-3), 過去未来の [+推定] とより大きな丁寧さの度合いの間に密接な関係があることは明らかである。もっとも, [+推定] は話し手がある事態が事実であることを知らないときに用いられるのに対し, (3)の場合, 話し手は, 自己がある願望を抱いているという事態が事実であることを知っているのので, ここでの過去未来は厳密な意味での [+推定] で使われているとは考え難い。よって [+推定] から何らかの意味的な拡張が生じ, それがより大きな丁寧さと関わりを持つと考えるのが妥当であろう。

本来の [+推定] は命題が事実に合致する可能性が妥当であることを意味するが (cf. 3-4), これは同時に命題が事実に合致しない可能性も残ることをも, すなわち減ぜられた事実性である [+事実性緩和] をも含意する。(3)の場合, 過去未来が本来的に有する [+推定] は, この論理的関係を介してメトニミ的に [+事実性緩和] へと意味拡張し,<sup>8</sup> これがより大きな丁寧さを生んでいるのではなからうか。なぜなら, [+事実性緩和] を用いて願望を述べれば, それが(別世界における)事実であるか否かの判断は最終的には聞き手に委ねられることになるからである。より分かりやすく言えば, [+事実性緩和] を用いて願望を述べるということは, 話し手の側から願望を事実として押し付けるのではなく, 聞き手にその事実性の判断を委ねるという譲歩を示すことであり, そしてこの譲歩は, 願望を受け入れてもらいやすくするためのポライトネスとして解釈可能だからである。このように, 過去未来における [+推定] → [+事実性緩和] の意味拡張を指定することにより, 半過去よりも大きな丁寧さの度合いが説明可能になると考えられる。

他方で「あなたと話すこと (falar consigo) が成立すれば, それを私が気に入る (eu gostar) 可能性のほうが, そうではない可能性よりも高い」のように解釈することも不可能ではなからう。つまり gostaria の [+推定] が条件に対する帰結の [+非必然性] へと拡張しているとの解釈である (cf. 3-2)。だがこのように考えた場合, [+非必然性] を聞き手がなぜより丁寧なものとして捉えるかの説明が難しい。さらに, 過去未来と半過去は(14)のように, 願望だけではなく必要性の婉曲的表現にも用いられ得る。

(14) Precisaria / Precisava de falar consigo. 「あなたとお話しする必要があるかもしれません / あるのですが。」

この例の場合は(3)とは違い, *falar consigo* を条件的語句と考えて *precisaria* / *precisava* がその帰結を指示すると解釈することは難しく, よって *precisaria* の [+推定] が条件に対する帰結の [+非必然性] へと意味拡張しているとも考え難い. 他方, [+推定] がメトニミー的に [+事実性緩和] へ変化していると考えれば(3)と同様の解釈が可能なので, 本論では暫定的にこの考え方を採ることにしたい.

### 3-4. [+推定] → [+未来]

1の(4) *Ele disse que voltaria no dia seguinte*. 「彼は翌日に戻るだろうと言った。」と(5) *Ele disse que teria voltado no dia seguinte*. 「彼は翌日には戻っているだろうと言った。」で見たように, 過去未来と過去未来完了は間接話法において文字どおりの時制的機能を果たすことも可能である. 過去未来完了とは“ある過去時にとっての未来時から見た事態の終結”であり, 過去未来とは“ある過去時にとっての未来時から見た事態の未終結”である. すなわち話し手はまず [+過去視座] によって過去のある時点に視座を置き, 次にその視座を相対的な未来時に移動させ — この機能を [+未来] と呼ぶことにする —, そこから [+終結] によって事態の終結の有無を表示するのである. [+過去視座] と [+終結] はこの2時制が基本的に有する素性であるが (cf. 2-1 と 2-2), [+未来] は共時的には [+推測] から拡張した素性であると考えられる. ある時点から見て未来の事態は, その時点では知られていない事態なので, 必然的に知識ではなく推定など推論の対象とならざるを得ない.<sup>9</sup> つまり [+未来] と [+推定] は前提と帰結の関係にあり (「もしある事態が未来に位置していれば (前提), それは推定など推論の対象とならざるを得ない (帰結)」), この関係に基づいて [+推定] が [+未来] へとメトニミー的に意味拡張していると考えられる.

## 4. 基本的素性と拡張的素性を用いた分析

ここでは, (1)~(7)で用いられている半過去・過去完了・過去未来・過去未来完了を, あらためてその素性 — 基本的素性 (2-1~2-4), もしくは, そこからメタファーやシネクドキー, メトニミーによって拡張した素性 (3-1~3-2) — へと分析し (以下 4-1~4-4 ではこの分析を *iria* [+非現実視座] [+非必然性] のように表示する), その上で, PE の日常的な話し言葉において, どのような条件のもとで半過去・過去完了による過去未来・過去未来完了の置き換えが生じているかを明確にしたい.

4-1. 置き換え有り: 過去未来・過去未来完了が [+非必然性] [+事実性緩和] を表示  
過去未来・過去未来完了が非現実的な条件文の帰結節や婉曲的な願望文に用いられる場合である.

(1) *Se eu tivesse...*, iria [+非現実視座] [+非必然性] / ia [+非現実視座] [0非必然性] ...

(2) *Se eu tivesse...*, teria ido [+非現実視座] [+非必然性] / tinha ido [+非現実視座] [0非必然性] ...

(3) Gostaria [+別世界視座] [+事実性緩和] / Gostava [+別世界視座] [0 事実性緩和] de falar consigo.

反実仮想文の帰結節(1)(2)と婉曲的な願望表現(3)において重要なのはそれぞれ“事態の非現実性”と“聞き手と願望との隔たり”の表示であり、これには [+過去視座] からそれぞれメタファーとメトニミーによって派生した [+非現実視座] と [+別世界視座] が用いられる。他方、反実仮想文で過去未来・過去未来完了が表示する [+非必然性] と婉曲的な願望表現でそれらが表示する [+事実性緩和] は、現代 PE の話し言葉では二義的な扱いを受けて使用が衰退していると考えられる。

#### 4-2. 置き換え有り：過去未来・過去未来完了が [+未来] を表示

これは問題の 2 時制が間接話法において過去のある時点から見た未来の事態を表示する場合である。

(4) Ele disse que voltaria [+過去視座] [+未来] [-終結] / voltava [+過去視座] [0 未来] [-終結] no dia seguinte.

(5) Ele disse que teria voltado [+過去視座] [+未来] [+終結] / tinha voltado [+過去視座] [0 未来] [+終結] ...

PE 話し言葉の間接話法で [+未来] としての過去未来・過去未来完了の使用が一般的ではないのは、直接話法で [+未来] としての未来・未来完了が用いられなくなっていることと平行しており、 [+未来] としての未来諸時制の衰退を示していると考えられる。そもそも、半過去はその [+過去視座] [-終結] によって“過去のある時点での未終結の事態”すなわち“過去における現在～未来の事態”を表示するので、文脈の支えがある限り、 [+未来] を積極的に持たなくても過去未来の表示が可能である。また過去完了は、その [+過去視座] と [+終結] によって“過去のある時点で終結している事態”を表示するが、その [+過去視座] は、主節で表示されている過去時 ((5)であれば Ele disse の時点) と同時である必要性はなく、過去の範囲内であればどこにでも設定可能である ((5)であれば Ele disse から見て未来の no dia seguinte の時区間に設定されている)。よって [+未来] を積極的に持たなくても、文脈の支えがある限り、過去のある時点にとって未来の時点 — これもまた過去のある時点であることに変わりはない — から見た [+終結]、すなわち過去未来完了を表示できるのである。

#### 4-3. 置き換え無し：過去未来・過去未来完了が [+推定] を表示

これは過去未来・過去未来完了が反語的な修辭疑問文に用いられる場合である。

(6) Teria-me enganado [+非現実視座] [+推定] / <sup>x</sup>Tinha-me enganado [+過去視座] [0 推定] na hora?!

この型の修辭疑問文は、談話の中で言及・示唆された仮定的な命題に対して話し手が憤慨・驚愕し、



それを打ち消すような場面で用いられるのが典型的な用法である (cf. CARREIRA 2003, p.67). 話し手はその仮定的な命題と事実との一致可能性が妥当であるかを問いつつも ([+推定] とイントネーションによる [+疑問] で表示), 最終的にはその命題は事実ではないとの判断を下す ([+過去視座] から拡張した [+非現実視座] で表示). 言い換えれば「私は間違えたのだろう [+推定] か? [+疑問] いやそれはない [+非現実視座]」という意味構造である. したがって, イントネーションによって表示される [+疑問] を除くと, 定動詞は [+推定] と [+非現実視座] の双方を表示する必要があり, これを併せ持つ過去未来・過去未来完了のみが使用可能となる.

#### 4-4. 置き換え無し: 過去未来・過去未来完了が [+推定] を表示

これは過去未来・過去未来完了が過去時を視座とする推定を表示する場合である.

(7) A Maria teria [+過去視座] [+推定] / <sup>x</sup>tinha [+過去視座] [-推定] 20 anos quando a encontrei.

この場合, 話し手は過去の時間的視座に身を置き, そこから推定を行っている. 前者は quando o encontrei と [+過去視座] によって, 後者は [+推定] によって表示される. [+過去視座] と [+推定] はともに重要であり, これらを併せ持つ過去未来・過去未来完了だけが用いられることになる.

### 5. 終わりに

1 および 2-4 の分析により, 現代 PE の話し言葉における過去未来・過去未来完了と半過去・過去完了の関係について, 以下の諸点が明らかになったと考えられる.

- ① 現代 PE の話し言葉では, 過去未来・過去未来完了はその多くの用法で半過去・過去完了によってシステマティックに置き換えられている (cf. 1).
- ② ①の置き換えが生じるのは, 過去未来・過去未来完了が [+非必然性] や [+事実性緩和] のモダリティ的価値や [+未来] のテンス的価値を有する場合である (cf. 4-1, 4-2).
- ③ 他方, 過去未来・過去未来完了がテンス的な [+過去視座] を表示するにせよ, モダリティ的な [+非現実視座] を表示するにせよ, それと同時に [+推定] のモダリティ的価値を有する場合, ①の置き換えは不可能である (cf. 4-3, 4-4).
- ④ ②と③が意味しているのは, 現代 PE の日常的な話し言葉では過去未来・過去未来完了に属する [+非必然性] [+事実性緩和] [+未来] の使用が衰退しており, もっぱら [+推定] の意味で用いられる傾向が強いこと, および, [+非必然性] [+事実性緩和] [+未来] の使用衰退に伴って, これ

らの素性を除くと等価でかつ無標の半過去・過去完了が、過去未来・過去未来完了の領域を侵食しているということである。

- <sup>1</sup> 本稿は日本ロマンス語学会第 50 回大会（上智大学 2012 年 5 月 20 日）における口頭発表に基いて執筆された論考である。
- <sup>2</sup> ヨーロッパ標準ポルトガル語 português-padrão europeu とは、地理的には Lisboa と Coimbra において、社会的には高等教育を受けた人々によって話され書かれる変種（標準規範）をモデルとし、公的な場で用いられ、教育の普及やマスメディアの発達によって全国の地域方言に影響力を増しているポルトガル語を指す。
- <sup>3</sup> 本稿の例文は、筆者が実際の会話や web 上で収集した実例に改変を加えたものであるが、Coimbra 大学 Centro de Neurociências e Biologia Celular 研究員の Nuno Machado 氏（Coimbra 近郊の Mealhada 出身で Coimbra 大学理学部卒業）、Coimbra 市役所文化部門勤務の人類学者 Sérgio Madeira 氏（Coimbra 出身で Coimbra 大学文学部卒業）、Porto 市近郊の Trofa 市立 Escola Secundária 勤務の教員 Carolina Braga 氏（Coimbra 出身で Coimbra 大学文学部卒業）の 3 氏全員が一致して統語的・意味的に適格もしくは不適格と判断した正文もしくは非文のみを用いている。
- <sup>4</sup> 規範的には ter-me-ia enganado だが、上記インフォーマント 3 氏によると、今日の日常的な話し言葉では一般的ではない。
- <sup>5</sup> 憶測、推定、推断はそれぞれ speculation, assumption, deduction の訳語である。モダリティの類型論的カテゴリーとしての Speculation, Assumption, Deduction については PALMER, pp.24-31 を参照。
- <sup>6</sup> メタファーとは、2 つの事物・概念の間の何らかの類似性に基づき、一方の事物・概念を指示する形式を用いて、他方の事物・概念を指示することである。「職場の花」の「花」が「人目を引く美しさ」を媒介として「植物の 1 器官」ではなく「人」を指す例など（cf. 辻 2002, pp.16-17）。
- <sup>7</sup> シネクドキーとは、より一般的な意味を持つ形式を用いてより特殊な意味を表したり、より特殊な意味を持つ形式を用いてより一般的な意味を表すことである。たとえば「お茶でも飲みに行かない？」では、より特殊な意味の「お茶」（本来の意味は「緑茶」）を用いて、より一般的な意味の「非アルコール飲料」が指示されている（cf. 辻 2002, pp.158-159）。
- <sup>8</sup> メトニミーとは、2 つの事物の外界における隣接性や、さらに広く 2 つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を指示する形式を用いて他方の事物・概念を指示することである。たとえば「夏目漱石を読む」では「作家」とその「作品」の関連性に基づき、「夏目漱石」によって「作家」ではなくその「作品」が指示されている（cf. 辻 2002, pp.35-36）。
- <sup>9</sup> 未来の事態は推定のみならず poder による憶測の対象でも、dever による推断の対象でもあり得よう。しかしながら、憶測は対立する複数の可能性を同等に扱うので、この形式のみを用いて具体的な未来像を描くことは不可能であり、また推断は対立する可能性を排除して唯一の可能性のみを提示するので、知られざる未来像を描くには断定性が高すぎる。他方、未来諸時制による推定「だろう」は対立する複数の可能性の中からあるものをより妥当なものとして提示するので、poder とは違って具体的な未来像を描くことが可能であり、かつ dever ほど断定性が高くはないので、未来の表示にはより一般性があるかと思われる。多くの言語において共時的に [+推定] と [+未来] に密接な関係があるのはこのためであろう。

#### (引用・参考文献)

- ALARCOS LLORACH, Emilio (1980): *Estudios de Gramática Funcional del Español* (3.ª ed.). Madrid, Editorial Gredos.
- CÂMARA JR., Joaquim Mattoso (1972): *The Portuguese Language*. Chicago, University of Chicago Press.
- CARREIRA, Maria Helena Araújo (2003): *Pratique de portugais de A à Z*. Paris, Hatier.
- CARREIRA, Maria Helena Araújo (2004): "Modalités et verbe en portugais." In: *Revue Belge de Philologie et d'Histoire* 82. Bruxelles, Société pour le Progrès des Études, pp.691-702.
- COMRIE, Bernard (1981): *Aspect*. Cambridge, Cambridge University Press.
- COMRIE, Bernard (1985): *Tense*. Cambridge, Cambridge University Press.
- FLEISCHMAN, Susanne (1982): *The Future in Thought and Language: Diachronic Evidence from Romance* (Cambridge Studies in Linguistics). Cambridge, Cambridge University Press.
- MATEUS, Maria Helena Mira, Ana Maria BRITO, Inês Silva DUARTE e Isabel Hub FARIA (2003): *Gramática da Língua Portuguesa*. 5.ª ed. revista e aumentada. Lisboa, Editorial Caminho.
- MOENS, Marc and Mark Steedman (1988): "Temporal Ontology and Temporal Reference." In: *Computational Linguistics* 14. pp.15-28.
- OLIVEIRA, Fátima (1985): "O Futuro em Português: alguns Aspectos Temporais e/ou Modais". In: *Actas do I.º Encontro da Associação Portuguesa de Linguística*. Lisboa, APL, pp.353-357.
- OLIVEIRA, Fátima (2000): "Some Issues about the Portuguese Modals dever and poder." In: *Belgian Journal of Linguistics* 14. Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- PALMER, F.R. (2001): *Mood and Modality*. 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge, Cambridge University Press.
- PERINI, Mário A. (2002): *Modern Portuguese: a reference grammar*. New Heaven, London, Yale University Press.
- SANTOS, Diana (2003): *Português para estrangeiros: Gramática básica para alunos que já falem e escrevam a nossa língua*. <http://www.linguateca.pt/Diana/download/portugisisk.html> で閲覧可能。
- STEN, Holger (1973): *L'emploi des temps en portugais moderne*. København, Munksgaard.
- TEYSSIER, Paul (1985): *Manuel de langue portugaise: Portugal-Brésil*. 2.ème éd. revue et corrigée. Paris, Klincksieck.
- VENDLER, Zeno (1967): *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York, Cornell University Press.
- 彌永史郎 (2007): 「ポルトガル語の直説法時称」. 『Anais XXXVII (2005-2006)』, pp.19-37, 日本ポルトガル・ブラジル学会.
- 河上誓作編著 (1996): 『認知言語学の基礎』, 研究社.
- 杉本孝司 (1998): 『意味論 2 - 認知意味論 - 』, くろしお出版.
- 辻幸夫編 (2002): 『認知言語学キーワード事典』, 研究社.
- 寺崎英樹 (1998): 『スペイン語文法の構造』, 大学書林.
- 牧野真也 (2010): 「ポルトガル語の直説法完全過去の本質的な意味機能について」. 『ロマンス語研究 43 号』 (印刷中), 日本ロマンス語学会.
- 松本曜編 (2003): 『認知意味論』 (シリーズ認知言語学入門第 3 巻), 大修館書店.